

# 翻刻『曾我根元評判大全』

卷之拾八

## 凡例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名に（ ）を付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

## 翻刻

後藤多津子

曾我根元評判大全 卷之拾八

本章

小松三位中将の公達六代御前 □□が中にも忍馴 西□□の片里  
に母公と月日を送らるゝ内に 平家西海に亡び 余類悉く捜さるゝ  
に 今は早や焼野ゝ雉子の如く也 然る処に 越中次郎兵衛盛副  
西国を落尋来り 今は中々 都の内住居成がたし 平家の嫡流也  
源家より許すべからず 爰に 高雄山神護寺 文覚上人は剛強の大  
智識也 其上 頼朝大恩を請らるゝ 出家と言 気筋と言 助命疑

ひ不可有<sup>五</sup> 盛副は 御台所 当八歳に成り給ふ六代を具し奉り

高雄寺に参 偏に奉頼 文覚<sup>学</sup>不便に思召 師弟の契約有縁に発足

鎌倉に來りて一向願成就して 高雄に帰り 今日よ明日よと年月を

過て 今は十七歳に成り給ふ<sup>五</sup> 然る処に 頼朝公 彼の景清 忠光

が武勇を感じて 盛副□□六代に付従ふ 是敵の張本也 差置べか

らずと下知頻りにして 召捕て死罪にすべしとの事也 文覚<sup>学</sup>上人大

きに憤り 一度助命して 今何□命を召さるゝや 其儀におめては

文覚<sup>学</sup>平家を取□べきとて 眷属<sup>けんそく</sup>を召れて 伊勢国一志郡森本村の山

奥 日河といふ所に隠れ忍ばるゝ 鎌倉より日本国中に下知有て

搜し求めらるゝ 終に被尋出 数千人討に向故に 文覚<sup>学</sup>上人 弟子

僧坊三拾人 井母公 六代 相伴ふ面々二拾余人 生害に及 越中

次郎兵衛盛副 戦□交すといへども不相叶 終に退き 生害し畢

今に及び石碑あり 二月中旬 毎年祭礼あり 平家正流既に断滅し

畢 盛副は日河大明神迎 近在の氏神也

六代文覚<sup>学</sup>上人を被頼事

爰に いたわしきは小松内府重盛の孫六代御前也 母公は関白基

実公の姫君にて 当時鎌倉殿之□□義ある事なれば 代に榮へ給<sup>五</sup>は

ん人なれども 平家の張本なれば 都を落給<sup>五</sup>ふ跡にて 普代家臣監

物太郎が母 西□□の辺に逃 成□居□□ 此方へ落忍んで 平

家の運を待給<sup>五</sup>ふに 西国の働き空く 悉く滅亡と聞給<sup>五</sup>ひて また父

入道殿<sup>との</sup>にも熊野浦にて入水ありける由 今は早<sup>は</sup>や生害にも可及と歎

き給<sup>五</sup>へども 当年八歳になり給<sup>五</sup>ふ六代御前 無双之利発 美しき愛

想なり 常さへ有に親子の哀 ましてや美敷不便深く 歎の内にも

若や源家に搜し出されんやと 虫の息も立<sup>た</sup>て給<sup>五</sup>はず 其内に 西海

にて悉く滅亡 越中次郎兵衛盛副來て 維盛入水<sup>道</sup>之事 西海の有様

を語りて 忠光 景清の 若君を守護のため紀州に來たり 維盛之  
 入水も知らず 御行衛を尋奉れり 今此所に忍び有ん事は必定也  
 何方に隠れ忍ぶとも終には尋出され 平家之一類は根も立て  
 ざるべし 忍ぶ共中々可被忍に非ず 今更 平家の一門を集め会稽  
 の恥をすゝがんと思ふ共 中々不可 只御命全く 行衛成長  
 の跡を奉尋 当時之頼朝も伊豆の蛭が小嶋に遠流□□ 今又 天下  
 反覆の□□ふ 爰に 高雄山に □□文覚上人は尊き智識にて  
 剛強の僧にして 鎌倉殿にも大恩を見せたる人也 前方 白川院宣  
 を賜はりたるは此上人也 □□奉らん 今は一向御供申奉り 高雄  
 に参り 御命迄を仕らは□□ 六代を懷に抱き 母公の御手を引奉  
 □□ 瑞女老人を召具して 泣々高雄に参りて 盛副案内申入るゝ  
 文覚上人□真なる法師也 常々 只一骨情にして 有の儘武士心之  
 人也 即時に対面有て見給ふに 扱くいたはしの有様哉 母公の

被申は 平家の一門滅亡 夫小松殿の入水 別れの難き 捨身候べ  
 く候 此六代が命の程 今は早や行先塞る世の中 偏に上人の御慈  
 悲を似 命助り 御弟子に□□成候而 一家の後生菩提をも弔ひ申  
 さんと 跡や先やと只一向に歎き給へり 其躰を見て 文覚上人  
 痛はしやと思召 時に越中次郎兵衛盛副□□候 無面目仕合 西国  
 の戦に逃れ來り候も 偏に此六代御前おはず故 君臣上下之間 此  
 時節□□ 若君の御命を大切に存じ 偏に上人奉頼 何とぞ鎌倉殿  
 に御訴訟 御諫言を奉頼との事也 又 六代□□いたいけに母公にお  
 し離れ 上人の御膝下に走り寄 御弟子に被成 命助り 母□養ひ  
 申度候 御僧様を奉頼と袖にすがり 二方より泣立られ 文覚上人  
 □□哀に大きに心折れ泪を流し げにや平家悪逆方に過 此文覚をも  
 流罪せられ 彼是の恨みあり 既に頼朝に院宣を乞て渡したり 勿  
 論 平家は憎かりき 然れども 平家世に栄たる時は 肥馬門前に

充滿して 小松殿<sup>□</sup> なんと。 仮初の対面<sup>敵</sup>も不相叶 道の中は輿

車也 然る所に 今歩行跣しにて 此法師を頼申<sup>□</sup> 便なくいたは

しけれ <sup>□</sup>也 是非に不及 此哀は見捨申まじ 先々 寺内に

隠し申さん さればとて 俄に一間をしつらい 休息なし参らせ

世に念比<sup>ねん</sup>に勞わり給<sup>いた</sup>へり 去程に <sup>□□</sup>一統の上に 京都に役所を

建て 平家の落人を搜し求め 隠し可被置様もなかりけり 文覚<sup>学</sup>つ

く<sup>か</sup>案<sup>あん</sup>じ給<sup>よ</sup>ふ とかく此儘に忍ぶ共 終には搜し出れて哀を見

るは必定也 我鎌倉へ下り 頼朝へ直<sup>□□□□</sup>乞請来るべし 心安か

れ 其内は隠れ忍んで奉置給<sup>よ</sup>へと 念比に<sup>□</sup>含て<sup>□□</sup> 鎌倉に下向

有けり 惣じて 猛き人は荷担事<sup>か</sup>深く 人間落目被見るに忍ざるも

の也 此文覚<sup>学</sup>上人は天<sup>□</sup>の生得にて 只一向に弱<sup>よ</sup>きを救<sup>す</sup>う氣筋に<sup>□</sup>

前方 頼朝の流人之節も荷担申されたり <sup>□□</sup>疾<sup>と</sup>しや遅しと 鎌倉

に下り 御館に押付来り給<sup>よ</sup>へり 頼朝は伊豆の小嶋の節より 別而

馴染<sup>名</sup>の上人也 殊に院宣を賜<sup>給</sup>はりしは此文覚<sup>学</sup>の大恩也 此故に 上

なき尊敬也 各<sup>□</sup>大名相共に列座有けり 文覚<sup>学</sup>上人 頼朝対面 外

の事は不被申 如何に兵衛督殿 前方は貴<sup>き</sup>辺の頼に依て事を謀る

今は又 貴殿を頼敷事有てはる<sup>か</sup>く下りたり 聞届<sup>よ</sup>給はんやと被

申たり 其時 頼朝の被申は 何かさて上人の願ひ 背き可申に非

ず <sup>□</sup>しき之召 神護寺造立の沙汰<sup>さた</sup>延引に及び 定て此儀<sup>儀</sup>に候

はん 相心得申 可然様沙汰可仕にて候 被仰時に 上人被申は

いやく 左様<sup>さやう</sup>の事に非ず 是非平押に頼申事あり 平家小松殿の

公達六代御前 当年九歳也 卑弱<sup>ひじやく</sup>にして女のごとく 物の用に可立

人に非ず 又曾て武士心無之人也 愚僧が弟子に可仕にて候 一

命を被助 世間を広くなし参らせん 願ひ<sup>□□</sup>候と被申たり 頼朝

聞召 上人の仰に候はゞ 如何成事も相心得候へ共 是は平家の嫡

孫にして 頼朝が仇敵にて候へば 千里の野辺に虎を放すに似たり

此儀は相叶□□儀にて候 □□為を被思召は 仮令助命仕共 上  
 人の心として 何者になし給はん事なり 凡 仏法にも 又重て乱  
 騒は招き給はじ 六代害人を殺さば 敵の根を断にて候 其儘に差  
 置申さば 幾万人の死生存亡に可及哉 兎角に此儀は相叶まじく候  
 と答給へり 上人種々に被申といへども 再三断は□ 埒明兼たり  
 文覚大きに怒り あらゆる聞へざる頼朝や 凡 恩を見 恩を不知  
 は畜類に相同じ 貴殿 蛭が小嶋にありて 哀 院宣を申請度との  
 願ひ有 又 心弛みて 幾度諫めても思ひ立なかりしに 文覚色々  
 に心を尽し進め申奉り 貴殿に□して 平家を追討の祈念□申て  
 今 鎌倉殿と諸人渴仰する 是偏に文覚が働きによるもの也 然る  
 に 今 神護寺建立の沙汰も延引 寺領番所之事 約束の半分也  
 然ども 此等は不足も非ず 然ば 此度の願は一生一代の文覚の願  
 ひ 何事も此事也 相叶候は 五□生じ 其上 六代を俗に

して差置にこそ渡世の恐れもあらん 出家□門□□すべし 然ば  
 何の氣遣ひもなき事也 是非奉願 若不相叶時は 文覚不可立此座  
 金剛童子に命乞 断食して命を断 御恨み可申と 座を打て□りは  
 申さるゝ 頼朝聞給ひ 又兼て文覚之法力も知給ふ 申さるゝ条仕  
 兼まじき人也 其上 院宣申給はりしは 全く文覚之働也と思はれ  
 ける程に 又 難黙止事 終に文覚の所望に任て 六代之一命を助  
 参らす 此上は 拾五歳に成時は出家得度可有と也 文覚も大きに  
 悦び給ひ 扱も 人に情は有べきもの也 元來 頼朝の心は屈情に  
 して 他人申旨は取上なきの人なれ共 文覚が昔の奉公を思ひ給ふ  
 故に社 □□□□ 悦入申たりとて 只一息に高雄山に帰り 親□  
 の面々に申聞 悦び給ふ事限りなし 此故に 母子共に高雄寺に年  
 月を過さるゝ 上人は他人の評判も世の噂も少しも頓着なく 只心  
 の儘にぞ□かれ置る 次郎兵衛盛副は元來深き大望有 忠光 景清

杯行合たらば。又 平家を取立 反覆之功を思へども 流石に文覚<sup>学</sup>

の心入無他念故に 雖然 月日を送りけり 斯て 彼是月日過て

六代御前は十五歳も過行て 今は十八歳に成給<sup>玉</sup>へり 年来 高雄山

□ひ 何様出家也 さすべき平家の正統也 暫く俗にも可仕□哉

□給<sup>玉</sup>ひけり

六代御前□盛副生害文覚<sup>学</sup>上人落着之事

然る処に 建久五年 忠光 景清 一念深く頼朝を狙ふ 此儀<sup>義</sup>に

依り 頼朝の心に懸りけるにや 先年 文覚<sup>学</sup>上人の命乞に依て助命

したる六代御前 既に成長する迄出家の沙汰も無之 此儀<sup>義</sup> 後々は

源家の病根也 急ぎ□殿殺害<sup>殺</sup>すべきとて 城四郎資兼に被命 依て

千余騎を卒して上浴<sup>浴</sup>して 若 違議<sup>議</sup>に及ばず 押懸て可討亡との御

下知なり かくて城四郎は 先穩便に神護寺へ以使者申入趣は 六

代御前之儀<sup>義</sup>は 平家嫡流といへども上人の御弟子 出家可有との事

ゆへに御免有たり 然る処に 十「五」歳を過て未だ<sup>いま</sup>出家受戒之沙

汰も無之ゆへ 上人に達し 急ぎ遠流可仕との事にて 城四郎御迎

に來りて候 先穩便に御案内□□の事也 文覚<sup>学</sup>上人大きに腹を立て

こはそも如何に何事ぞや 頼朝一度赦免有て 今又手の裏返すごと

く可有様やある □□に文覚<sup>学</sup>が弟子なれば 坊主にせん共俗にすべ

□とも 心のまゝ也 今日迄 鎌倉殿の悪しかれとは曾て不思□

此の儀是非に不及 六代御前を取立て大将として 平家氏族を集め

文覚<sup>学</sup>が後見して 天下反覆の功を可立ぞ 目に物を見せん 高雄寺

よりは洛中<sup>洛中</sup>の街にて 六代の謀叛斗 我前方修行之只中 道筋能く

知りたる險岨の地有 いでさせ給<sup>玉</sup>へと 六代御前并母公 又は次郎

兵衛盛副 其外平家の余類 監物太郎一子小監物 □馬<sup>成</sup>が甥也 飛

驒の三郎 文覚<sup>学</sup>の弟子若輩の荒法師三十人 彼是六七十人 追々跡

より来れと申□ 其夜□に 高雄寺を忍出 伊賀越の山中より  
直に勢州一志郡日河といへる山中に忍て 籠居致されけり

勢州一志郡森本村之内極山中 日河村といふ所□ 西方に高

山有て 日月の光り河の如く中に有故 日河と号したる昔の名也

文覚上人 此所に入給ふ節 未だ村人も無之 獵人番人有之 此所

に御殿しつらひ □に隠里には是ほどの地も有まじとて 夫より平

家の余類を集め 文覚の弟子衆諸方より集り 薪は山林の中也 野

菜は山野草を取 或は 鳥獸は盛副が矢先に留めて養とす 兵糧米

は文覚自由に出て 大和 河内勢の内を修行致さるゝ大善智識の事

也 布施物多奉り 深山也 又 日河の近村 宮地 森本 □王寺

□□□在の村々から 哀を知りて朝夕の賄ひする故 大きに福栄也

世の中に伊勢の隠れ里とは此所也 然る所に 城四郎資兼は 文覚

上人 六代をつれて逐電の由 鎌倉に注進 依て 頼朝下知は 文

覚上人は奉捕 遠嶋すべし 六代御前をば 越中次郎兵衛盛副 首  
を可勿 □度々也 依て 城四郎 五畿之内悉く搜といへども

曾て行衛不知 彼深山 近辺里々に□□ 文覚の事也 又 平家も

いたわしく 誰申出人もなし 其上に 伊勢は平家の本国なれば

根繼て忍び給へり 然所に 爰に不思議あり 森本村矢下谷より流

来る谷川に 刻たる薪の燃□来れり 或は消し炭 又は野菜の切端

など 雑水白水流来れり 城四郎見て 扱は 此山奥にも人社大勢

住躰也 大方は六代御前の御座ならんと 其近辺の童べ子供に尋

童べ共何の弁もなく 誰とは不知 朝夕に此川筋に大勢人有 僧法

師□住候と申 扱こそ 文覚 六代に紛なし 急ぎ□取と 先

手勢五百人 ひたくと打懸り 矢鏢 長刀 □等取持て 深

山幽谷に分け入るゝ細道 一里□行て 小□有 其あなたに中平か

成所有 谷峰廻難く 四方八面追取巻て 先 鯨波を上につけり 此

節 不依思騒動□ 文覚上人勇剛の人にして 少しもうろたゆる事

もなく 六代御前を奉具 百□の□も相同じ 文覚□如何にも 御

生□□□可申と思へども 今は早や是迄に候 母公も人手にかゝり

給はんより生害し給へと 山の腹にありて 次郎兵衛盛副は□一宿

して 後より取巻防がんと□□□□ 城四郎資兼は山の高みにあり

て 大音にて 如何に文覚上人は 右大将家知偈□縁有之故に 隠

岐国に流罪申べき事也 また 六代御前には尋問わるべき子細是あ

るに付 城四郎御迎に來候 疾くく出せ給へ さもなくんば 可

□□□呼はつたり 文覚上人は衣の上に玉襷をかけ 氷のごとき刃

を抜て 螺貝を吹□□音声にて 城四郎 鎌倉殿に可申は 文覚

頼朝の為に奉仕申たるは莫大也 六代を申乞□り 何ほどの事や有

然る所に 一応免許を交じ 今又 命を召るゝ 人には□報ひ有物

也 其節を待給へ 六代 此僧を頼とする 他人手にはかけまじと

山の腹にて 母公 六代を一刀づゝに差殺す 向の山腹に弟子三十

人 真言陀羅尼を同音に誦誦する 文覚は刃を抜き持ち 岩根の方

に寄り添□ 谷底へ飛入給へり 諸人死失給ふと思へり 今に石碑

有 此節に上人は逐電 仙人に成 一生其儘□不知成にけり

越中次郎兵衛盛副は 最期の戦ひすべしと思ふ□ 六代御前の最

期を見て 是迄と大音にて 此□□□の無念 外には行まじ 平家

普代の越中次郎兵衛盛副 最期の様 鎌倉殿にも申給へと 谷川の

少し小高き所の青石の上に丸を彫りて 魂魄を入 日河大明神とて

所之氏神として 毎年二月廿□日祭礼有 今此村は獵師村也 家数

三十軒ほど有□□也 日河の次助といふ獵師 其節より□村に相続

の者也

付記

資料の閲覧に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館に厚く御

礼申し上げます。